



Temptation

～催腫の奈落～

著：春風琴

画：唯々月たすく

原作：Parthenon



ぶちばら文庫

出会った
その日から、

舞奈は僕の
人形になった。

プロローグ	淫落への誘い	5
第一章	調教の始まり ～屈辱の催眠美少女～	10
第二章	口淫服従調教	40
第三章	催淫処女喪失	71
第四章	淫乱覚醒	100
第五章	淫乱メス犬の野外絶頂交尾	131
第六章	淫乱学園生活	160
第七章	主人とメス犬のデート	187
エピローグ	催淫純愛 ～芽生えしもの～	230

そうして午後の授業が始まった。

「……はあつ、はあつ、はあつ……」

舞奈は、声を抑えようと必死だった。

すぐ隣でも、前後の席でも、クラスメートたちが真剣に黒板に向かっているのに……授業の真っ最中なのに。

（それなのに、わたしは……オナニー……してる）

いけない。こんなことはいけない。授業中なのに。周りに皆がいるのに！　そう思っても、舞奈は自分を止めることができなかった。

（はあつ、はあつ、はあつ……。き、気持ちいいよおつ。　どンドン……溢れてきちゃうよおつ……）

最初は下着の上からペンで軽く刺激しているだけだったのが、いまはもう、それだけでもとても我慢できずに、大きく脚を開き、ショーツの中にまで指を入れてクリトリスをぐりぐりと刺激していた。

本気のオナニーだった。

（じゅ、授業中に、こんなコトしてるなんて……。わ、わたし……。わたし、イケナイ子になっちゃったの……？）

清楚で無垢だったはずの自分は今この教室にはいなかった。

今はただ、快楽を貪る一匹の淫乱なメスと化していた。

（でも……。でも、ダメなのっ。我慢できないのっ……んっ……。くうんっ……。はあん、あつ、ああん……。きもちいい……。教室でオナニー、きもちいいよお……）

さっき悠が囁いた言葉は、別に命令ではなかったはずなのに。これではまるで、自発的にオナニーをしてしまっているかのようだった。

でも、悠に囁かれてからずっと、教室でオナニーをするという、その魅惑的な想像が頭を支配していた。

『どれくらい気持ちいいんだろう？』

『どれだけ声を我慢できるだろう？』

『いつも以上に濡れちゃうのかな？』

そんなことをしてはいけないと思えば思うほど、舞奈の頭の中はオナニーでいっぱいになってしま



っていた。

気がつけば机の下に手を入れて、オナニーを始めてしまっていたのだ。

「……んあっ……はあん、あっ……ああんっっ」

抑えきれない喘ぎが、少しだけ表に出てしまった。

舞奈は心臓が止まるような思いで、周りの気配を探った。

依然として、教室は真面目に授業を受ける生徒達の姿だけがあった。

「……よ、よかった……誰も気づいてないみたい」

心臓の鼓動が高まる。

バレたらどうしようと思った瞬間、子宮からじゅんと本気汁が溢れていた。

（もう少し。もう少しだけ愉しみたいから……だから、気をつけて触らなくちゃ……）

行為を止めるという選択肢は舞奈の頭の中から完全に欠落していた。今はただ、いかに快楽を長く楽しむかだけしか頭になかった。

（休み時間までは、もう少しだけ時間がある。それまでゆつくりと愉しもう……）

舞奈はそう心に決めて、またショーツの中の指を動かし始めた。

生温かい粘液が、舞奈の指に淫靡に絡みついていった。

長い授業もようやく終わりを告げた。ホームルームを終えると放課後になる。

部活にゆく生徒、寄り道をする生徒、早々と帰宅する生徒。思い思いに皆が放課後の時間を過ぎ始める。

「フフ……どんどん変えていつてあげるよ、キミの心をね……」

「悠……君……？」

悠は舞奈に囁くと、一足先に校舎を出て学園の裏庭に向かった。

それに従うように舞奈も裏庭へと歩いてしまう。緊張のためか、興奮のためか、舞奈の顔はすでに蒸気して赤くなっていた。

「クス……それじゃあ、胸を出して自分でいじってみてよ、桐原さん」

「ほ、本当はこんなこと、したくないのに……」言葉とは裏腹に、舞奈はセーラー服を擦り上げ



て片方の胸を露出すると、ブラジャーを上にはずらして、自分の指で乳房に触れた。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

早くも息が上がっている。先程のオナニーで体は十分に敏感になっていた。

普段あまり人のいない裏庭とはいっても、いつ誰が来ないとも限らない。

そんな中で舞奈は必死に声を押し殺しながら、自分の胸を揉みしだいた。

（気持ちよくなってるんだから……。悠君に言われたから、それでしかたなくやってるだけ……）

それなのに、乳首は硬くなってしまっている。

「あっ……あっ、ああっ……」

恥ずかしいのはもちろんだけど、それだけじゃなかった。

舞奈の中で、別の感情——興奮が湧き出てきていた。

（わたし、感じてる……）

甘い喘ぎ声を漏らして、乳首をこんなに硬くして、乳房はいやらしく汗ばんでしまっている。

舞奈は否定しようのないぐらい自分が感じてしまっていることを認めざるを得なかった。そう思うと、これが悠に言われたからしているのか、自分自身が愉しみたいからなのか、舞奈にはわからなくなってきていた。

ふと見ると、悠は口元に微笑を浮かべながら、舞奈が必死になって自分の胸を弄る様ずっと観察していた。

（悠君に逆らえないのも、ほんとはわたしがそれを望んでいるから？）

「ああん、そんな……いやあ……」

考えながらも、手の動きは止まらなかった。

見られていると思うと、それだけで体の芯が熱くなって、頭がぼーつとして、子宮がきゅんと疼いて、ショーツにエッチなシミを作ってしまう。

「はああんっ！」

胸の突起に指が触れた瞬間、身体に電流が走った。乳首が痛いほどしこっていた。（イ、イヤライ……こんなに硬くなって……わたしの乳首……）

「はあっ、はあっ、はあっ……ひっ……」

舞奈は自分の指で乳首を執拗に責め立てる。

優しく擦り、軽くつまんでこねる。

「あっ、いいっ……そ、それ……凄く気持ちいいっ……はああっ……」

舞奈の息はますます荒くなり、立っているのもやっとという状態だ。

（わたしの身体、いつからこんなにえっちになっちゃったの？）

その様子を悠は口元に微笑を浮かべたままじつと見つめる。

（……悠君のせい？）

自分がこんなに淫乱なはずがない。そんなはずは……ない。

（悠君のせい……だよ……そ、そうだよ……少し触っただけなのに、凄く気持ちよく感じるようになって……きつとそうに違う。……悪いのは……わたしじゃない）

「んっ……くっ……はあん、あつ、ああん！」

（だから、こんなに気持ちいいのは、わたしが、おかしい子だからじゃない……）

舞奈は自分がこんなに淫らでイヤラシイ女の子だなんて認めたくなかった。

「はあっ、はあっ、はあん……あつ、ああんっ！」

（ひ……お、おっぱい、気持ちいいっ……気持ちいいよおっ!!）

体を痙攣させて、あまりの快楽に舞奈はその場にしゃがみこんでしまった。



「フフ……自分でそんなに乳首を弄って、凄い気持ち良さそうだったね、桐原さん」

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

舞奈は荒い息をつきながら、呆然と地面を見つめていた。

「今日はこのくらいにしておいてあげるよ、桐原さん……フフ」

悠は踵を返すと、舞奈を裏庭に放置して遠ざかっていった。

「うっ……えぐっ……ひっく……」

（どうして……どうして、こんなことになっちゃったの……？）

緊張から解放されて、舞奈の瞳からは堰を切ったように涙が溢れた。

今朝、強引にキスをされるまでは平穏な学園生活のはずだった。転校の不安もあったけれど、なんとかこの学園でやってゆけそうだと思った矢先だった。

……それが、今まで想像もしたことのない事態に見舞われていた。

このまま、悠に逆らえないまま自分はどうなってしまうのだろうか。

舞奈が泣き止んだのは、もう辺りが暗くなったころだった。

（お母さんが心配しちゃう……）

最愛の家族に心配をかける訳にはいかない。今回の転校のことで娘の自分のことをただ

でさえ氣にかけている両親に、更に心配をかけたくなかった。

舞奈は乱れたセーラー服を直し、ハンカチで涙を拭いて、帰路についた。遅くなってしまったから、きつと心配しているだろう。

「ただいま……」

「舞奈、遅かったじゃない。何かあったの？」

母が玄関まで迎えに出てきてくれた。……ここで、今日のことを報告すれば、もうあんな思いをしないですむかも知れない。

「……ううん、ちょっと友達とおしゃべりしすぎちゃって……遅くなって、ごめんなさい、お母さん」

でも舞奈は、今日のことを母に話すことができなかった。

（わたし……どうなっちゃうんだろう……）

セーラー服のままベッドに身を投げ出して、天井を見つめる。今日の出来事がありありと浮かんできた。

……下着が冷たい。授業中の教室でのオナニー、放課後の裏庭でのおっぱい弄り。溢れ出た愛液がショーツにぐっつちよりと染みて、冷たくなっているのだ。

まるで、お漏らしでもしてしまったような氣がしてきて、舞奈は更に恥ずかしくなった。悠に操られていたとはいえ、自らの指でクリトリスを刺激し、膣内に指を挿入し、乳房

を揉みしだき、その濡れたままの指で乳首を弄った。

そんなことをしたのは自分じゃないと思っても、現にこうして下着がぐっしより湿ってしまうほどに愛液を垂れ流し、感じてしまっていたのだ。

（わたしは、いやらしくなんてない、そんな子じゃない……）

まだ恋すら知らなかった舞奈の心が、音を立てて崩れてゆく。

罪悪感、背徳感。そんな意に反して、心と体は快楽を求めようとする。戸惑いつつも舞奈は、自分の変化を認めざるを得なかった。

（明日も……また、悠君に何かされるのかな……）

鏡の前で歯を磨きながら、舞奈は自分の顔を見つめていた。……また、この唇を思い通りに吸われてしまうのだろうか。

（また……オナニーもさせられちゃうの……？）

お風呂に入りながら、自分のバストを持ち上げる。

放課後のめくるめく快楽を思い出して、乳首が疼いてくる。

（でも、違う……こんなのわたしじゃないよ……違うよ）

それでも舞奈は抵抗した。……まだ頑張れる。わたしは、わたしでいられる。

言い聞かせるように、舞奈は心の中で繰り返した。

「……おやすみなさい、お父さん、お母さん」

なんとか両親には、今日のことを気づかれずにすんだ。

舞奈は自室のベッドに潜り込むと、枕に顔をおしつけ、声を押し殺して泣いた。

急激に快楽を覚えてゆく自分の体が怖かった。そして、心が操られてしまうことも。

それでも唇が、乳首が、子宮が切なく疼いてしまっていることを、舞奈は認めざるを得なかった。

そのころ、悠は自室で今日のことを振り返っていた。

「フフ……桐原さんの心を覗くのも、僕へ反抗心を抱かないようにするのも、さほど難しくなさそうだな。あとは、心を壊さないように気をつけながら、彼女の心を少しづつ淫らにしていけばいい……」

無理は禁物だ。相手が心の奥底で激しく抗うようなことを強要し続けると、場合によっては壊れてしまうことだってある。

今日だって、更に執拗に舞奈を操り続けたら、精神が崩壊してしまうことだってありえ

たのだ。

そうなってしまうたら、元も子もなくなってしまう。

催眠の能力を行使することは、慎重さも必要だった。

「力の加減が難しいけど、じつくりと桐原さんを僕の思い通りに変えてゆこう。フフ、まだまだいくらでも僕には時間があるんだから」

あの無垢で可愛らしい桐原舞奈を自分の色に染めてゆく。

それはとても興奮する想像だった。

「……次は桐原さんに何をしてもらおうかな？」

悠は明日の計画を練りながら、眠りについた。

「はあ、はあ、はあ……」

地下室の床の上で、わたしは手足を投げ出していた。

それは、宴の後だった。

今夜、この部屋で、夕方から真夜中まで行なわれていたパーティ。

そこにわたしは、悠君に連れられて参加したんだ。

パーティーは永遠に終わらないかと思うぐらいに続いた。

わたしは、何人もの違う相手とセックスした。

わたしは、どんな要求にも応じて、男の人の快楽を満たすことだけに身を捧げた。息つく間もないほど、上の口も下の口にも、ずっと挿入されっぱなしだった。

「どうだった、桐原さん？ 気持ち良かった？」

わたしが弄ばれている間、他の人とセックスしていた悠君がわたしに訊ねた。

「……………」

「桐原、さん？」

わたしは、心の中で何かが壊れる音を聞いた気がした。

わたしは、繰り返し何人もの男の人に抱かれて、身体じゅうに精液を浴びせられてドロドロの身体をしていた。

口元からはヨダレが、股間からは愛液と尿の入り混じったものが、だらしなく垂れ流されていた。

わたしの視線は、虚ろなまま宙をさまよっていた。

「……大好き」

「えっ？」

壊れてしまったわたしが、なにかを呟いている。



「舞奈、オチンチンが大好きなんです……お願いします、もっと、もっと、挿れてください……」

「桐原さん……」

わたしの瞳は、虚ろなままだった。感情が死んでいた。

「……失敗しちゃった。桐原さん、壊れちゃったよ」

悠君が何か呟くのが聞こえた。でも、わたしの頭はもう人間の言葉が聞こえても、それを理解することができなかった。

「今度はもっとうまくやらなきゃ。……そう、今回の経験を反面教師にして、次はもっとうまくやれるはずだ。身体も、心も、壊さない程度に」

悠君はわたしのような壊れた人形には興味が無いらしい。

悠君の中で、わたしに対する関心が急速に薄れてゆくのがわかった。

「僕には、この『力』があるんだから。……そうなんだ、誰も僕には逆らえないんだ……クスッ」

もう悠君の眼中にわたしはいなかった。

「次の獲物は、誰にしようか。ふふっ、ふふふふっ……」

悠君の嗜虐的な笑い声が地下室に木霊した。

わたしは、汚れたボロキレのように、捨てられてしまった。

「……ッ!？」

舞奈は声にならない悲鳴を上げた。

ここは……自室。地下室なんかじゃない。

理解するまでに時間がかかったが、泣きながら眠ってしまい、悪夢を見てしまっていたようだ。

全身が汗でびっしょりと濡れている。心臓がバクバクいつている。呼吸が乱れている。すぐに、さっきまでの恐怖が夢とは思えないほどリアルに蘇ってきた。

（……夢で……よかった……）

心の底から安堵する。

……でも、このまま悠からエッチなことをされ続けたら、いつか本当に自分は壊れてしまうのかもしれない。

（いや……いやだよ、そんなの……）

舞奈は再び枕に顔を押し付けて涙を流しながら、明日も続くであろう恐怖に怯えるのだった。

ぷちばら文庫

Temptation (テンプテーション)

～催淫の奈落～

2010年 9月30日 初版第1刷発行

■著 者 春風栞
■イラスト 唯々月たすく
■原 作 Parthenon

発行人：久保田裕
発行元：株式会社パラダイム
〒166-0011
東京都杉並区梅里2-40-19
ワールドビル202
TEL 03-5306-6921

印刷所：中央精版印刷株式会社

本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、
かたくお断りいたします。

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©SHIORI HARUKAZE ©Parthenon

Printed in Japan 2010

PP002